

<意見交換の概要>

2014年3月6日

第155回青少年委員会

『絶対に笑ってはいけない地球防衛軍24時!』意見交換 概要

日テレ...番組の基本コンセプトは大晦日の夜、視聴者に大笑いして年を越してもらうことです。1年間にたまったストレスを吹き飛ばしてもらいたいとの思いから、6時間という長尺の放送時間の中で、あらゆるジャンルの笑いのツボを番組内で出し切り、できるだけ多くの人に笑ってもらいたいと考えました。「笑いの総合デパート」を目指して、さまざまな笑いを追求する中に、一部、視聴者によっては不快であるかもしれない場面もあるかとは思いましたが、これを「笑いのツボ」ととらえてくれる人もいます。私たちは、「絶対に面白いはずだ」と信じて番組を作りました。

委員...放送日が番組ファン以外の人も見ているであろう大晦日ということ、また、放送時間への配慮はどうだったのですか？

日テレ...貴委員会が問題と指摘している場面を放送した時間帯は、いずれも番組後半の大人の時間であり、大晦日というのは、年忘れ、まさに最後の憂さ晴らしの日であるという側面もあります。笑いのジャンルに応じて放送時間帯は配慮していることをわかっていただきたいと思います。

委員...放送の公共性をどう考えますか？

日テレ...貴委員会が2000年に見解として、「番組全体の文脈から、その表現の必然性が納得されない限り、公共の場所で見せられないものは扱うべきでない」「エンターテインメント番組であっても公共性の制約を受ける」という大原則を示されているのは承知しています。

この番組は、ある種の毒を含む番組として多くの視聴者に親しまれています。奇想天外な芸も含めて、ある人は不快と思ってもある人はそれが面白いと思う。そのうえで、強調したいのは、それまで落ち込んでいた視聴者が「こんなにもくだらないことを本気で真面目にやっている人がいる」のを見て、大笑いするだけでなく、生きる希望、勇気、元気を与えられたということもあります。現に当社には「沈んでいたが生きる希望をもらった」という多くの若者の声が届いています。つまり、バラエティー番組の表現の必然性を満たしており、「生きる糧ともなる」公共性を満たすものと考えています。

委員...私たちは、視聴者から個々のシーンについてのご意見をいただいています。まずは部分のところを議論するのです。全体が良いから部分的なことを問題にしないで良いということは出来ないことをご理解ください。

日テレ...不快だった人もいたかもしれませんが、性的な興奮を促すような映像の撮り方は絶対にしていません。個人差はあるかもしれませんが、私たちは笑ってもらえると腹をくくって制作しました。

委員...不快だと予想が出来たのになぜ放送したのですか？

日テレ...バラエティー番組の理想は、「誰も傷つけずにみんなに喜んでもらうこと」、しかし、同時に「毒舌の社会風刺や痛烈な皮肉も娯楽には不可欠」。また、番組は常にチャレンジすべきで、萎縮せずにやっ払いこうというのが私どもの基本的な姿勢です。もちろん視聴者の意見は真摯に受け止め、今後の番組作りに生かしていきたいと思っています。

委員の方の中には全編を見ていない方もおられるということですが、エンディングで斉藤和義さんが替え歌で「もう若くない、節々が痛い、五十超えても面白くありたい、笑顔でいたい、笑って生きたい」と歌い、“今年も笑いが溢れる一年になりますように...”とスーパーを出して締めくくっています。そのような制作側の想いが委員の方全員に伝わらなかったのは残念です。

委員...私たち青少年委員会は、視聴者や委員が疑問に思っていることについて当該放送局の方と意見交換を行い、その概要を公表するという責務を負っています。また、私たちはテレビのバラエティー番組が果たしている役割は圧倒的に大きく、みんなが心から笑えるような番組を作っていただきたいと思っています。そのために議論して多様性を確保することが放送における「公共性」であると考えています。ですから、意見交換は現場の制作者と委員との議論の場であることをぜひ理解していただきたいと思います。